

インターネットの利用実態及びその依存傾向と自尊感情の関連性

高橋 大地

インターネットは現在、年齢や地域を問わずあらゆる人々が利用できる存在である。インターネットで行える行為は膨大で便利になったが、その反面、ネットコンテンツの拡大に伴ってインターネットを過度に使用するインターネット依存症という問題も生じている。依存症は年齢を問わず、若年層の症例として学業の不振、運動不足や生活リズムの悪循環などの影響が分かっている。また、依存症状は複数存在し、コンテンツの拡大に伴ってインターネットの多様化を示しており、依存への複数の視点からの理解が必要とされている。

一方で社会生活における試験や就職活動などの競争は、他者と否応なしに比較され、そういったときに他者との比較により自分に対して自信を失う場面が少なくない。そういった現状を受け入れるのに必要なのが自尊感情である。自尊真の低下はメンタル系の心身症状が多く、インターネット依存の原因と考えられる。その分析を行った。

インターネット依存症尺度と自尊感情尺度と使用し、大学生 167 名に対してアンケート調査を行った。統計的に分析を行い、先行研究との比較対象を行った。ネット上のコンテンツの使用状況は他データと比較により、一定の一般性を得られた。ネットにおける他者とのコミュニケーションは、「単独利用型」と「コミュニケーション型」に分類し、自尊感情とのカイ 2 乗検定をおこなったが、有意な関係は見られなかった。インターネット依存症と自尊感情のカイ 2 乗検定では、有意な関係が判明した。最も残差が大きかった「インターネット依存度の上位群」と「自尊感情の下位群」の組み合わせは、序論で危惧していたインターネット依存傾向の高い者と自尊感情の低い者の有意な関連性に沿ったものであった。また、同様に残差が大きかった「インターネット依存度の下位群」と「自尊感情の上位群」、「インターネット依存度の下位群」と「自尊感情の下位群」の組み合わせを合わせて考慮すると、上位群と下位群のみの組み合わせであり、中位群を含む組み合わせは有意な差がある残差として現れなかった。これは、自尊感情の程度とインターネット依存傾向が極端な状態である場合に特に関係があることが分かった。

インターネット依存症の分野は現在、先行研究が少なく未開拓部分や課題が未だ多く存在する。今日インターネットは発展分野であり、コンテンツも絶えず増え続けている。情報化時代の今、インターネットに対する理解と研究と発展が望まれる。

(指導教員 歳森 敦)